HIROSHIMA UNIVERSITY

第3回

広島大学附属学校園合同全国フォーラム報告書

— 附属学校園における特色ある教育研究に向けて —

2010
12/27(月)
9:30
12:15

全体会／広島大学文学部 B204 リテラ
分科会／広島大学教育学部
L102, L107, L109教室

学　長　挨　拶

学長の浅原先生が国大協の会議に参加されていますので，私が代理で挨拶をさせていただきます。

現在，いろいろな形で教育において変化が起こりつつあることは皆さんご存じと思われますが，大学にとっても状況は必ずしも良くありません。いろいろな意味で大学は考えなくてはならない状況にあります。例えば、大学に対する国家予算を考えても、例年と同様に削減していく方向は変わっていません。

そんな中でも附属学校は大学にとって大事な存在です。特に広島大学は１１附属学校園を有し，全国でもトップ規模の附属学校園です。今日皆様がお集まりのように，この部屋に入りきらないほどの教員が日々熱心に生徒を教えています。

そして１１附属学校園それぞれの学校に歴史があり，それぞれに特徴的な教育を行い，誇りを持っておられると思います。しかし，現在は大学と附属学校園を一体的に運営していかなければならないという状況にあります。

附属学校園の方でも，どのようにしたら広島大学本体と一体化して，まさに広島大学が誇る教育という面を強くしていけるかを考えてもらわなければなりません。

皆様方は，日頃から児童・生徒と教室の中で向き合って，熱心に教育をしておられます。

一方，今の大学に求められている教育は，ただ単に講義で一方的に教えて知識だけを詰め込むのではいけなくなってきています。世の中がこれまでと全く変わってしまい，予測できない時代を乗り切るための新たな力を若い人が持つように，教育の仕方も変える必要があるのではないかということです

大学としては，そのような力を学生の皆が身につけることができるような教育の展開を努力していますが，幼稚園，小学校などのレベルから同様の教育を行うことが今後より一層求められてくるのではないかと考えています。

今日のこのフォーラムは日頃皆さんが「これは」と言う形で展開している教育実践の内容を発表していただいて，それぞれディスカッションする場です。

どうぞこの機会を利用して広島大学の教育をどうするのか，広島大学附属学校園の教育をどうするのか，是非ともみなさんで熱く語っていただきたいと思います。

今日のこのフォーラムが盛会に終わりますことを祈念して，開会の挨拶とします。

平成 22 年 12 月 27 日

広島大学理事・副学長　　上　　真　一

副　学　長　挨　拶

「これからの附属学校園の教育について」

本日は文字どおり年末も押し詰まった師走のこの時期に、本フォーラムにご参加いただき誠に有り難うございます。このフォーラムでは、「附属学校園における特色ある教育研究に向けて」をテーマとし、附属学校の主要な責務である教育実習や教育研究、また具体の教育実践について、提案いただき情報交換、ご協議いただく予定です。お忙しい中、せっかくお集まりいただいた皆様にとりまして実のある、また次への展開につながるフォーラムであってほしいと願います。

さて、フォーラム開始にあたっての担当副学長からのご挨拶としまして、今日の附属学校の状況、また実際的に厳しい状況といったことも含めて、冒頭のご挨拶に相応しくない部分もありますが、申し上げることとします。

現在、広島大学には附属学校園が、5 地区 11 校園あります。附属学校教員数は 222 人、園児児童生徒数は 4124 人で、全国国立大学附属学校の中でも有数の規模を保持しています。そして、それぞれの校園が歴史と伝統を有し、成果をあげてきていることも誇るべき点です。また、全国の国立大学法人附属学校園は、56 大学に 261 校園、教員数約 5500 人、園児児童生徒数約 100,000 人です。広島大学附属校園と同様、伝統を有し特色ある教育活動を展開しておられるはずです。

しかし今日他方において、これらの附属学校園について社会のすべてが支援的好意的な眼差しで見てはいないということも承知しておく必要があるのではないでしょうか。国立大学附属学校園の存在意義が問われていると言ってもよいでしょう。国立大学として先に挙げたこれだけの規模を維持していく必然性は何か。先般、参加してきました附属学校担当副学長会議でも話題になりました。全体的将来的には児童生徒数が減少していく中で、公立学校の児童生徒を吸引しすぎてはいないか。実際に、いわゆる事業仕分けの対象になりかねない事態も考えられます。仮に附属学校園としての特有の機能があるとしても、先ほどの 10 万人規模の児童生徒数が本当に必要なのか。複数大学が連携した共同附属学校ではなぜいけないのか、全国共同利用化がなぜできないのか、という問いかけです。

事実、広島大学でも運営費交付金の削減の中、附属組織をどうしていくのかが大学全体としての大きな課題になっています。附属は学級編制、教職員定数の標準にそった規模を維持する必要性から、このままいけば附属の人件費が大学学部の財政を圧迫する事態も想定されます。

そこで求められるのが、附属学校園の役割機能の明確化と確実な機能遂行です。H21 年 3 月に文部科学省から「国立大学附属学校の新たな活用方策等について」の有識者検討まとめが示されました。そこでは、次の二項目が主要な機能としてあげられています。

１．大学の資源を活かした国の拠点校となること―――中長期的で先導的実験的な取り組み、研究開発学校制度の活用、国家的教育政策との連携推進等。

２．地域教育のモデル校となること―――地域的課題に応え地域教員の資質向上に寄与すること、地方教委との連携、現職教員研修、研究協議会等の発信等

また従来からの役割の充実として、以下のことが提言されています。

１．大学学部の研究への協力―――個人間ではなく組織としての取り組み

２．教育実習―――その成果を検証することが必要

３．大学教育への協力―――附属・大学授業交換交流等の試み

もちろん、広島大学各附属学校園はこれまでも上記の機能を担い、着実に果たしてきました。しかし、特に広島県内各公立校園が積極的な活動、取り組みを行っている現在、附属ならではの成果がどれほど果たせているか、客観的な目線での評価が必要と考えています。附属学校園の先生方には、また耳障りなことを申し上げます。最近、続けて附属学校園の公開研究会には今どれくらいの参観者がありますか、と聞かれました。かつては立ち見の余地さえなく、漏れ聞こえる音を一所懸命聞きとった、というお話しでした。いま附属学校はどの程度周囲の学校のベンチマ

ークとなっているでしょうか。周囲の学校がモデルとし、附属に比して我が校はどうかと気にする位置にあるでしょうか。

本来、私担当副学長の使命は、成果を積み上げることのできる環境条件整備をすることです。それをわきにおいて成果を求めることの矛盾は重々承知しています。附属学校園教員、先生方の水準以上のご努力ご苦労に敬意を表しつつ、なおさらに附属の存在意義を発揮しようとすれば、それは先生方お一人おひとりの肩にかかってこざるをえません。そして先生方がそれを担えるだけの力量を十分にお持ちであることは、私の確信するところです。

今まで培ったものを基盤としつつ、さらに発展していく附属校園であっていただきたいと願い、失礼な物言いがありましたことをお詫びして、ご挨拶といたします。

平成 22 年 12 月 27 日

広島大学副学長（学生支援・附属学校担当）　坂　越　正　樹

第３回広島大学附属学校園合同全国フォーラム　提案集目次

１．フォーラムへの期待
・・・・第３回広島大学附属学校園合同全国フォーラム　実行委員長　林　　武広 ……　１

２．教育実習部会（司会：小田　啓史，記録：瀬川　啓子）
○教育実践者としての基盤形成に重点をおいた実習
・・・・・・附属東雲小学校　川口　　浩 ……　３
○公立学校への訪問および授業参観
・・・・・附属三原小学校　川﨑　正盛 ……　４
○カンファレンス的な学びを取り入れた教育実習
・・・・・・・附属小学校　中田　晋介 ……　５
○生徒と関わる時間を大切にし，授業改善に活かす実習指導
・・・・・附属東雲中学校　松前　良昌 ……　６
○生徒理解・生徒指導と教課指導を２本柱とする教育実習の実際
・・・・・附属三原中学校　大和　浩子 ……　７
○本校の教育実習について
・・・・附属中・高等学校　新堀　稔文 ……　８
○教育実習における合宿生活の有効性について
・・・附属福山中・高等学校　池岡　　慎 ……　９
○実りを実感できる教育実習の実際
・・・・・・附属三原幼稚園　掛　　志穂 ……１０
○幼稚園教育実習の実際について
・・・・・・・附属幼稚園　日切　慶子 ……１１
○平成 22 年度海外調査プロジェクト―アメリカ海外調査
・・・・・・アメリカ訪問チーム　原田　良三 ……１２
○平成 22 年度海外調査プロジェクト―フィンランドにおける教員養成に関する調査報告―
・・・フィンランド訪問チーム　池岡　　慎 ……１３

３．教育研究部会（司会：谷　栄次，記録：岡田　泰）
○幼小中一貫教育研究の推進
・・・・附属三原学校園　吉原智恵美 ……１７
○「森の幼稚園」の保育プランの作成
・・・・・・・附属幼稚園　久原　有貴 ……１８
○授業力を高めるには？
・・・・・・附属東雲小学校　土井　　徹 ……１９

○共同研究における課題意識を喚起する研究の推進
・・・・・・・・・附属小学校　立石　泰之 ……２０
○義務教育における学び文化の創造―つながる学びを育む授業づくり―
・・・・附属東雲中学校　檜和田祐介 ……２１
○スーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ），及びコアＳＳＨの取り組み
・・・・附属中・高等学校　平松　敦史 ……２２
○全教科で取り組む文部科学省研究開発学校「クリティカルシンキングを
育成する中等教育　教育課程の開発」　・・・附属福山中・高等学校　山下　雅文 ……２３

４．教育実践部会（司会：風呂　和志，記録：松尾　砂織）

○特別支援学級とともに進める交流及び共同学習
・・・・・附属東雲小学校　梶山　雅司 ……２５
○校外班編制（地域別児童会）
・・・・附属三原小学校　小早川善伸 ……２６
○「自主・協同・探究」の精神を育み鍛えるための活動の推進
・・・・・・・附属小学校　青山　之典 ……２７
○国際理解・異文化理解を深める国際交流プログラムについて
・・・・・・附属東雲中学校　松村　　健 ……２８
○地域の高齢の方との交流学習
・・・・・附属三原中学校　藤井　志保 ……２９
○ＥＳＤのカリキュラム開発―ユネスコ・スクールとしての実践―
・・・・附属中・高等学校　藤原　隆範 ……３０
○学友会指導について
・・・附属福山中・高等学校　林　　靖弘 ……３１
○留学生との交流～いろいろな人とかかわる力の育成を目指して～
・・・・附属三原幼稚園　中山芙充子 ……３２
○「森の幼稚園」の保育実践
・・・・・・・附属幼稚園　松本　信吾 ……３３

附属学校園における特色ある教育研究を探る

第３回広島大学附属学校園合同全国フォーラム実行委員長
広島大学附属東雲小学校・附属東雲中学校　校長
林　　武広

全国の国立大学附属学校園は現在、岐路に立っています。全国の附属学校園から廃校、統合、学級減などの声が聞かれるようになりました。このような流れは次第に強まっていくと考えられます。その背景には、国の厳しい財政状況に起因する国立大学法人のあり方や少子化のような問題もありましょうし、戦後 60 年以上を経た社会的状況の変化に伴い、附属学校園に求められてきた役割も従来とは異なってきているともいえましょう。“これからの附属学校園にあり方や求められる役割とは何か”―このことが全国附属学校連盟関連の大会で話題の中心になっています。そのためにも附属学校園では公立校とも異なる特徴ある教育研究を一層推進することが重要と考えます。

このような中、私たち附属学校園の特徴をフルに活かし、教育研究の価値を一層高めるため、今後、どのような具体的目標を設定し、その達成のためどのような活動の展開が有益なのでしょうか。ちょうど今、そのことを真剣に考える必要に迫られています。今回の合同フォーラムは、広島大学の１１附属学校園の教員が一堂に会し、さらに本学校園以外の方々の参加も得る中で各学校園で進められている活動の成果や課題をもとに、広島大学附属学校園の特徴を活かす教育研究の具体像を見出す議論の機会とすることが大きな目的です。

附属学校園にはそれぞれの学校としての充実した教育の推進、教育実習、教育実践研究という３つの使命を背負っています。もちろんそれぞれが独自に存在するものではなく、互いに密接に連なっていることは言うまでもありません。そのこと自体が大きな特徴でもありますが、それらが有機的に密接に関連し合ってこそ、園児・児童・生徒への教育力、教員をめざす学生および現職教員への教育人材育成力、教育界への先進的教育の提案力が高められると信じます。例えば各校園教員による質の高い授業は、子どもの教育にとって非常に重要ですし、研究提案につながります。また、それを観察する教育実習生や、現職教員には意義深い示範となります。

広島大学の１１附属学校園は、それぞれ異なった背景のもとに設立され、それぞれの歴史と伝統を維持しつつ、今日まで維持、発展してきました。したがって、３つの使命に対する向き合い方や具体的な活動の基本は共通でありつつも、それぞれが特徴を有しています。今回の合同フォーラムでは、これらの使命を一括して議論することも大変有意義ですが、まずは取りかかりとして、それぞれの使命ごとに教育委実践部会、教育実習部会および教育研究部会において、各校園の活動や実践の成果と課題を共有するなかで、附属校園としての“特徴”を焦点化し、その後の全体会では、各部会での報告に基づき総合的に議論し広島大学附属学校園の特徴ある教育、研究について一定の示唆が得られることを期待してやみません。

本フォーラムの開催にあたり日頃より附属学校園にご理解とご支援を頂いております学長の浅原利正先生、副学長の上　真一先生、同、坂越正樹先生に厚く御礼申し上げますとともに、本フォーラム開催に際しご協力を頂いた副理事の松浦伸和先生、附属学校支援グループの皆様に感謝申し上げます。

今回の合同フォーラムは、附属三原幼稚園、附属三原小学校、附属三原中学校、附属東雲小学校および附属東雲中学校が担当校園として実行委員会を組織し、企画・運営を担いました。実行委員各位のご尽力に感謝しつつ、本フォーラムの有意義な成果を共に祈念したいと思います。

2. 教 育 実 習 部 会

					附属東雲小学校
部会	教育実習	研究	教育実践	発表者	川　口　　浩
提案テーマ	教育実践者としての基盤形成に重点をおいた実習				

内容の概略

（活動の目的と目標）

○教育者としての全人的陶冶

・個人の教育技量の向上

・実習生同士のチームワークを基盤とした活動

・社会人としての常識の体得

（活動の具体）

・指導案検討日の設定

実習に先立ち，夏休み中に指導を行う。

・教育実習期間を第Ⅰ期・第Ⅱ期に分けた効果的な実習

第Ⅰ期　基本的実習　（１週間）

・児童との人間関係醸成

・授業観察

・講話，講演の受講

第Ⅱ期　発展的・総合的実習（４週間）

・実際に授業実践，分析

・一斉授業，研究授業

・自主運営による研究授業後の検討会

◎所属学級の中でのチームワークを重視する。

◎容儀，礼儀，言動等，社会人としての一般常識に対する指導を重視する。

◎学校長による直接指導を行う。

成果と課題

○指導案検討日を設定することにより，実際の授業に先立ち，視点の明確になった指導案作成ができる。また，夏休み期間中のメールによる指導により，指導案の概要が固まり，実習開始までに，さらに手を加えることが可能になる。

○グループでの活動を重視することで，実習生同士に深い人間関係が生まれ，支えあいながら仕事に携わることの意義を実感させることができる。また，授業内容の充実等，実習としての深まりも生まれる。

○社会人としての常識を意識することの必要性を実感させることができる。

●放課後から退勤までの短い時間の中で，効率的な指導が求められるが，不十分なまま帰宅させざるを得ないことがある。

メモ

					附属三原小学校
部会	教育実習	研究	教育実践	発表者	川　﨑　正　盛
提案テーマ	公立学校への訪問および授業観察				

内容の概略

（活動の目的と目標）

○　教育実習生が本校と異なる教育現場を参観し，豊かな教育経験を積むことで，今後の実習に生かすことができるようにする。

・本校と異なる地域，規模，環境にある学校の教育活動を学ばせる。（竹原市立仁賀小学校は，小規模校であり，参観授業は複式学級の授業である）

・複数の学校を参観し，それぞれの学校の特色について学ぶ機会を設定すると共に，公立小学校の学校経営や学級経営などについて学ばせる。

（活動の具体）

竹原市立仁賀小学校訪問	三原市立三原小学校研究会参加
・授業参観×１ ・児童発表参観（学校紹介，太鼓） ・校長による講話 ・児童休憩，自由見学（児童と共に） ・掃除（児童と共に） ・仁賀小児童との交流会	・朝の会参観 ・公開授業参観×３ ・児童発表参観（合唱，鼓笛） ・協議会参加

成果と課題

	竹原市立仁賀小学校訪問	三原市立三原小学校研究会参加
成果	・複式学級の授業を参観することで，単式学級では見られない板書や授業の進め方などの工夫を観ることができた。 ・実習生が，ストーリー仕立てで脚本を書き，全員で予行演習を行うなど，主体的に計画・運営を行うことができた。	・公立学校の子どもの実態やそれに応じた授業の工夫などを観ることができた。 ・協議会において，現職の先生方と共に授業について交流をおこなうことができた。
課題	・参観授業や授業作りに関して実習生が質問をする機会がなかったため，訪問校の担当者と日程について協議する。	・実習終了日の前日であったため，大変忙しく，一斉授業の日程も研究会を間にはさんでの 2 日間になった。

※他にも幼小中一貫校の特性を生かし，幼稚園，中学校への保育・授業参観を 2 日間に分けて行っている。

メモ

				附属小学校
部会	教育実習　研究　教育実践		発表者	中　田　晋　介
提案テーマ	カンファレンス的な学びを取り入れた教育実習			

内容の概略

（活動の目的と目標）

教育実習において，学生に対しカンファレンス的な学びを取り入れることにより，子どもについて表層的な理解だけに終始させるのではなく，学生自身の考え方を自己吟味させ，より深層的な理解へと導くことを目的とする。

（活動の具体）

カンファレンス的な学びとは，学生が子どもについての理解を深めると同時に子どもに向き合ったとき学生の内部に発生してくる感覚や情動・感情を吟味しながら，自分自身の考え方を自己吟味させる学びである[1)]。このアプローチを今年度は，試験的に４学級で行った。実践した場面は，学級反省会という１日の学級の子どもたちの様子について話し合う場である。

本校の教育実習では，学級反省会の後，授業反省会を行っている。学級反省会では，学級担任が主導で行い，授業反省会は，教科担任が主導で行う。授業については，それぞれの専門性や授業を行う上で身に付けておくべき知識やスキルが存在する。そのため，授業反省会は，各教科において個人のスキル向上と学生の反省の視点を明確にした指導を続けてきている。学級反省会での指導内容は，各担任に任されている部分が多く，担任のこれまでの経験から指導すべき内容を決定し，学生に指導している状態である。教師の経験による指導の差が出やすい部分である。そこで，この学級反省会にカンファレンス的な学びを取り入れることにより，教師による経験の差をどの程度補完することができるのか，また，学生の自己吟味による振り返りがどの程度可能なのか調査を行った。具体的には，学級反省会では，指導というよりも，それぞれの１日の反省を述べさせ，それについて学生自身がどのように行動すれば良かったのか，自己吟味できるように振り返りの場を多く取り入れるようにした。

１）田中孝彦他，「カンファレンス的な学びとその意味について－「子ども理解」のカリキュラムと教師教育改革（その１）」，『日本教育学会第 69 回大会発表要旨集録』，190 頁. 2010.

成果と課題

カンファレンス的な学びを取り入れた指導とそうでない指導において，学生の満足度に有意な差は見られなかった。しかし，カンファレンス的な学びを取り入れた４つの学級の学生のアンケート記述では，子どもたちとの関わりから悩みながらも成長していった自分について記述している学生も見られた。また，日々の学級反省会において自己吟味によるリフレクションが行われ，子どもを多面的な視点から見る様子がうかがえた。このように，自己吟味により子ども理解へと導くことも可能であるように思われる。しかしながら，カンファレンス的な学びにおいても教員側の適切な言葉がけが必要となると考えられ，経験年数による差を全て補完できるわけではない。今後の取り組みとしては，反省会において自己吟味させる場を設定し，これまで以上に教師間の緊密な連携による学生を育てるという視点での指導を心がけていくことが必要である。

メモ

				附属東雲中学校
部会	教育実習　研究　教育実践		発表者	松　前　良　昌
提案テーマ	生徒と関わる時間を大切にし，授業改善に活かす実習指導			

内容の概略	**（活動の目的と目標）** 目的：責任ある教育活動を営むことができる実践力の習得 目標：①教材研究・学習指導案の作成をもとに授業を行い，その成否について科学的に分析できる。 ②場面に応じた生徒への対応や人間関係を構築することができる。 ③学校教育への理解を深め，協働の営みの中で教師になるための自覚を高める。 **（活動の具体）** 実習当初，指導案作成や授業において実習生は生徒の反応を予想できていないことが多い。場合によっては生徒の存在が感じられない場合もある。責任ある教育活動を営むことができる実践力の習得のために，まずは生徒の実態把握をさせる必要性を強く感じている。 生徒の実態を把握することに意識をもって指導案を作成することは，生徒にわかりやすく，しかも目標が明確な授業づくりにつながると考えている。また，生徒との関わりを多くもつことで，現場の状況を実感できるとともに，教師としての意識が高まり，その責任の重さを実感できると考えている。そこで，可能な限り生徒と実習生が関われる時間を多くもつようにし，生徒との関わり方やその重要性を認識させる機会をもつようにしている。 ・　ＨＲ，部活動，学校行事，昼食指導や清掃指導などへの参加 ・　特別支援学級の参観（実習Ⅰ・Ⅲ） ・　ＳＨＲの１日担任役，生活ノートへのコメント記入　など また，学級担任との学級の状況や指導方法についての懇話，生徒指導や道徳教育など各担当者による講話等を行い，様々な角度から学校教育について考える機会を設けている。なお，指導案作成や授業の進め方等については，資料「より良い授業づくりを行うために」を配布し，全教科が共通の認識をもって指導にあたっている。
成果と課題	アンケート調査や実習中の様子から，中学生の実態把握の重要性を，実習生が強く認識してきていることが明らかとなった。また，生徒目線をふまえた指導案作成や，生徒の実態把握を意識した授業づくりができるようになってきており，改善がみられてきている。 その一方で生徒とうまく関わることができない実習生や，実態の把握ができない実習生もいる。彼らが学校現場を体験し，その状況を理解し，自分が教師になるべきかどうか考えることは大切である。しかし，しっかり考えさせるためには，さらにきめ細かい指導も必要となり，現状では時間不足な場合がある。例えば，実習Ⅰに関しては，２校へ１０日間がいいのか，１校へ２０日間がよいのか，再考してもよいのではないだろうか。

メモ

			附属三原中学校
部会	教育実習	発表者	大　和　浩　子
提案テーマ	生徒理解・生徒指導と教科指導を２本柱とする教育実習の実際		

内容の概略

（活動の目的と目標）

教科指導の実習のみにとどまらず，現場教職員の勤務に少しでも近い勤務状態の実習を実現し，教科指導と生徒指導は常に表裏一体の関係にあることを意識させながら教育実習を行うことを通して，実習生の教職に対する基本的な姿勢を確立させ資質を高めることを目的とする。前期実習では実習生に生徒理解の重要さを認識させながら，基本的な教科指導の力をつけることを目標とする。それをふまえ，後期実習では生徒とともに作り上げる授業を構築する力を培い，教科指導の質を向上させることを目標とする。

（活動の具体）

本実習前の観察実習時から，本実習で配属となる学級で多くの「教科外活動」を観察させている。実習前打ち合わせにおいては，教科の担当教諭との打ち合わせだけではなく，所属学級の担任教諭との打ち合わせ時間も設け，諸活動の運営の仕方について事前に学習の場面を設定している。本実習では基本的に「生徒理解のため出来うる限り生徒と過ごし，生徒を見る」ことを推奨し，自分の教科以外の授業も観察させている。また，朝読書・毎日のＳＨＲ・昼食・清掃活動も生徒とともに行わせている。

また全実習生に対し，部活動への参加を必須としている。教科指導に関することで参加が困難な場合を除き，放課後の部活動には参加が原則である。実習生によっては朝の部活動にも参加し，生徒とともに汗を流している姿も見られる。

成果と課題

〇成果

生徒の立場に立った授業を構築していく際に，生徒個々人の思いや実態を考慮しながら指導案を立てることが必要である。そのことを，実感として理解させることができている。生徒と接すれば当然，生徒指導がうまくいくときもあればいかないときもあるが，多くの実習生は失敗を経験しながらも，たくましく実習をやりきっている。

〇課題

生徒となれ合うことが生徒理解だという間違った認識を持ってしまう実習生や，生徒との関係がうまくいかず意欲を失ったりする実習生も見受けられる。本校の実習の意義をオリエンテーション等で徹底する必要性と，メンタル面でのサポートの必要性を感じている。

メモ

			附属中・高等学校
部会	教育実習	発表者	新　堀　稔　文
提案テーマ	本校の教育実習について		

内容の概略

1年 間 の 流 れ

６月　教育実習Ⅰ・Ⅱ　　５月末から６月第２週までの２週間
　　中･高、高校取得希望の学生および母校実習生　約 90 名
　　教育実習指導Ｂ　６月第３週の３日間（授業観察および指導案指導が中心）
　　９月に教育実習の学生　約 120 名
　　教育実習入門　　６月第４週の１日（授業観察１時間、協議会１時間）
　　教育学部１年生　130～140 名

９月　教育実習Ⅰ･Ⅲおよび観察実習　　９月初めからの２週間
　　中･高、副免取得希望の学生および養護実習生　約 160 名
　　および実習生を観察する２年生　約 90 名

10 月　教育実習Ⅰ･Ⅲおよび観察実習　　10 月初めからの２週間
　　中･高、副免取得希望の学生および養護実習生　約 160 名
　　および実習生を観察する２年生　約 10 名

11 月　教育実習指導Ｃ　　実施時期は１１月ころ。
　　教育学部以外の学生を対象に、教科別授業分析･構成の講義・演習
　　本年度は国語科･英語科が各 24 名を６時間指導。

アクションリサーチ　　前期・後期各２週間
　　大学院生の教育実習　本年度　６名

成果と課題

成果

６月・９月・10 月の教育実習生へのアンケート結果

・教科指導に関する実習に満足･ほぼ満足　　９７．０％
・教科指導に関する指導体制に満足･ほぼ満足　９３．４％
・教科指導に関わっての否定的な意見は０。

課題

・教育実習で初めて学習指導案を書いた、という教育学部以外の学生がいるように、３年生が教育実習を行うにあたり、大学でのカリキュラム整備が必要と思われる。
・２学期日程の過密化
　10 月の教育実習終了後３日間の授業のみで中間テスト
　２学期始業日から中間テストまで　　教員による授業　　18 日
　　教育実習生による授業　20 日
　修学旅行・ＳＳＨプログラム･中等教育研究大会など
・９月、10 月と連続する実習について
　指導教員は「日程的に過酷」
　　実習生は「適当だと思う」と「不適当だと思う」の割合が２対１

メモ

				附属福山中・高等学校
部会	教育実習　研究　教育実践		発表者	池　岡　慎（教育実習係主任）
提案テーマ	教育実習における合宿生活の有効性について			

内容の概略

（活動の目的と目標）

自治運営の共同生活を通して，苦楽を共にしながら，互いに支えあうことの大切さを体感し，他者へのまなざしの意味を自らに問いかける。

（活動の具体）

オリーブ・記念館での合宿生活について
・合宿オリエンテーション，閉所式，あとかたづけ
・オリーブ約60名（男女），記念館約15名（男子のみ）
・部屋ごとの班長と全体の責任者（正副各2名）
・班長は，班員への連絡や体調管理，全体責任者は，鍵の管理や全体の統括
・風呂，洗濯機，冷蔵庫を共有（ルール作り）
・食事は夕食のみ（朝食，土日祝祭日は各自）
・食堂が夜間の自習室

成果と課題

※実習レポートより（文中の下線は発表者によるもの）

2週間大人数で共同生活をしてみて，思っていたよりも不便さ，不快さはなかった。これは，リーダーシップをとって，しっかりルール作りをしてくれた長がいたからだと思う。また，オリーブで生活していたメンバーも，お互いのことを思いやり，周りのことを考えた行動をとっていたと思う。さらに，授業の指導案を考えるのにいきづまったときなど，すぐに相談することができて，仲間の大切さを学ぶことができた。お互いに他人のことを考えた行動をとれたことで，頑張っている人を見て自分を鼓舞したり，切磋琢磨したりできたと思う。

メモ

			附属三原幼稚園
部会	教育実習	発表者	掛　　志　穂
提案テーマ	実りを実感できる教育実習の実際		

内容の概略	**（活動の目的と目標）** 幼稚園で幼児教育を具体的に体験させることを通して、今まで習得してきた教育の理論と理解をより深めさせると共に、教育技術、実践的指導力の習得をはかり、教育者としての精神と資質を向上させることを目的とする。保育実習や反省会、事後指導などの中で幼児理解を深め、子どもとの向き合い方を学び、教師としての資質向上に意欲をもたせることを目標とする。 **（活動の具体）** ２週間の実習期間のうち、第１週目の始めに観察実習をし、２日目以降部分実習を行う。第２週目の初めに再度観察実習をし、その後全日実習を行う。部分実習と全日実習の両方を実習生全員ができるようにしている。また、学生の学びの実際を知るために、第２週目の途中で実習に関するアンケートの実施を行っている。内容は、この実習での学びは何だったかとか、実習をすることで教育観は変わったかなどの具体的に自分を見つめさせるものである。そこで出た意見をもとに実習内容が充実したものになるようにしている。さらに、日々の事後指導では、実習生に「自分や他学生の保育を振り返り、ポイントを絞って自分だったらどうするか」などを演習も含めながら考えさせている。教師は、実習生の保育から、どのような指導助言が必要か、資料はどのようなものが適切かなど、折りにふれ教師間で事後指導の内容を交流している。また、小学校教員を目ざす実習生が多いという点から、事後指導の中で幼小連携や幼児教育についてなど実際の子どもの姿から幼児教育の大事さについても指導内容で触れている。
成果と課題	○成果 第２週目に観察をいれることにより、子どもとの向き合い方や幼児理解のしかたなどの視点がはっきりし、その学びを第２週目の全日実習に生かすことができている。また、事後指導の内容を教師間で交流することが、全体の指導内容の質を高め事後指導を充実させることにもつながっている。また、幼児期に大切なことや幼小連携についてなどを子どもの姿とそれに対する教師の姿を交えて話すことにより、教師としての資質向上に意欲をもたせることにもつながっている。 ○課題 アンケートをもとに指導助言内容の充実をはかっているが、その結果について教師間の交流をする時間がとれず実習が終わってからの交流になることもある。指導助言内容のさらなる質向上のために教師間での交流の時間確保や適宜内容改善に努めることが必要と考えている。

メモ

				附属幼稚園
部会	教育実習　研究　教育実践		発表者	日　切　慶　子
提案テーマ	幼稚園教育実習の実際について			

内容の概略

〇幼稚園教育実習の目的

幼稚園で幼児教育を具体的に体験することを通して、今まで習得してきた教育の理論と理解をより深めるとともに、教育技術、実践的指導力の習得をはかり、教育者としての精神と資質を向上する。

〇幼稚園教育実習の内容

今年度は、実習参加学生は１５人おり、１クラス５名という形で行った。期間は２週間であった。実習内容は、観察実習を２日、部分指導と全日指導を一人一回ずつ、残りの日程は参加実習という形で行った。

〇幼稚園教育実習のアンケートより

２週間という期間について、ちょうどよいと答えた学生は３３％、短いと答えた学生は６７％だった。将来幼稚園の教員を希望して参加した学生は２名で、その他は小学校との違い、幼児の実態について知りたいので実習に参加したという学生がほとんどであった。実習をする中で、子どもと触れ合いたい、保育者の子どもへの接し方、環境について学びたいなど様々な期待をもっており、そのことについて学ぶことができたという意見が多くあった。また、子どもと実際かかわることで実態が分かった、子どもの見方に変化があった、人と真正面からぶつかり合うとはどういうことなのかについて、体で学べたという意見があった。中には、幼児は何もできないというイメージをもっていたが、自分のできる中で精いっぱい生きている、一人ひとりが考えをもっていることが分かったなどという意見も見られ、幼児に対する理解を深める経験につながったようであった。

成果と課題

実習を終えて、子どもたちを集団としてではなく一人一人を捉えることや、子どもの気持ちに寄り添うことの大切さを学べた、子どもと向き合うことができたなどの意見が多く見られた。このことから、実習の成果としては、個に応じた指導の大切さを感じたり、自分なりにかかわりを考えたりする機会になったことが挙げられる。また、全実習生が実習が意義があったと答えたことから、学生にとって学びのある実習になったようであった。

もっと学びたいことや、改善して欲しいことについては、実習が始まって２日目から保育をしたのが負担だったことや、事前に観察実習をして実態を学びたかった、子どもたちの様子が分かり始めたところで実習が終わってしまったという意見があった。このことから、２週間という短い期間の中で、保育実践や、指導をどのように充実させていくかということが挙げられる。また、一クラスにおける学生の数が年によって変化するため、人数が多い場合には保育者として幼児を指導する時間が短くなるという課題も挙げられる。さらに、先にも述べたように、将来幼稚園教諭を希望する学生が少ないためか、学生の意識に個人差があり、実習に対してやる気のない学生がいるということが課題となっている。

メモ

			海外調査
国	アメリカ	発表者	原　田　良　三

内容の概略

目的：

附属学校に関する中期目標を達成するため、教育学研究科と連携し、世界的視点から、教員養成を行っている大学ならびに教育実習校を訪問して、先進的な教育実習と教育実践研究に関して、信頼性かつ妥当性のある調査を実行する。以って、本学のシステムの見直しをするための一助とする。

調査内容：

１．期　間：　平成22年9月19日（日）～9月25日（土）

２．訪問先：　１）Indiana University(IU)
　　Bedford-North Lawrence High School
　　Fairview Elementary School
　　２）San Francisco State University(SFSU)
　　Lowell High School

３．構成員：　原田良三（附属中・高）　大塚　豊（教育学研究科）
　　掛　志穂（三原幼稚園）　林　武広（教育学研究科・東雲校長）
　　下前弘司（附属福山）
　　松本信吾（附属幼稚園）
　　山崎学肖（附属東雲中）

４．調査結果（日米比較）：

	〈日本（広島大学）〉	〈アメリカ〉
・実習期間	２～５週間	１年間
・実習校配置	附属学校園	公立学校園
・指導教員と実習生	１対複数	１対１
・Supervisor	無	有
・教員免許	全国共通	州
・採用（公立）	県、市など	各学校

成果と課題

資質向上を目指す教員養成の課題

１．教育実習の充実
　・実習生の数（教員志望の有無）
　・指導体制（大学と附属との連携）
　・指導内容（カリキュラム）
　・実習期間（附属の負担）

２．教員養成をめぐる国内の動き
　・教職大学院（高度化プログラム）
　・教員免許更新制
　・中教審答申

メモ

					附属福山中・高等学校
部会	教育実習　研究　教育実践			発表者	池　岡　慎（チームリーダー）
報告テーマ	平成 22 年度　海外調査プロジェクト －フィンランドにおける教員養成に関する調査報告－				

報告の概略

1．はじめに

例年になく猛暑の続く日本とは異なり，フィンランドは初秋を迎え，調査団としては，非常に心地よい時期に教育立国を訪問する機会を得ることができた。ヘルシンキ国際空港では，ムーミンやその仲間たちからの歓迎を受け，長旅の疲れを忘れさせてくれた。また，ユヴァスキュラの街は，極寒前の季節を楽しむかのように活気に溢れていた。人々は，遠い国からやってきた我々に優しく，母語と英語をうまく使い分けているようで，滞在中は，ストレスを感じること無く日常生活を送ることができた。

さて，フィンランドの教育に関する調査・研究は，これまでに数多くの書籍や論文で報告されているが，本プロジェクトの最大の特徴は何であるか。それは，広島大学の教員養成や教育実習に深く関わっている教育学研究科の先生方や大学の職員と附属の教員が，所属や教科を超えて行動を共にし，本調査を実行したことである。本学におけるこれからの教員養成のあり方に関して，その成果と課題を共有する機会を得ることができたことは非常に価値のあることだと思われる。

2．プロジェクトの目的

本プロジェクトは，附属学校に関する中期目標を達成するため，教育学研究科と連携し，世界的観点から，教員養成を行っているフィンランドの大学ならびに教育実習校を訪問して，先進的な教育実習と教育実践研究に関して，信頼性かつ妥当性のある調査を実行することである。そして，その調査を踏まえて本学のシステムの見直しをするための一助とすることを目的とする。

3．調査チーム

本調査の構成員と所属は以下の通りである。（五十音順敬称略）

・池岡　慎　（広島大学附属福山中・高等学校教諭）　＊本プロジェクトチームリーダー
・植田　敦三　（広島大学教育学研究科教授）
・梶山　耕成　（広島大学附属中・高等学校教諭）
・川﨑　正盛　（広島大学附属三原小学校教諭）
・久原　有貴　（広島大学附属幼稚園教諭）
・中田　晋介　（広島大学附属小学校教諭）
・濱尾　健　（広島大学教育室附属学校支援グループ）
・松尾　砂織　（広島大学附属三原中学校教諭）
・松宮　奈賀子（広島大学教育学研究科講師）

4．調査期間

本調査は、事前打合せを含め，平成22年8月21日（土）～8月26日（木）の期間で実施された。なお，現地での調査は，23日（月）～25日（水）（ただし，最終日は午前中まで）で行われた。

事前打合せとして，8月10日（火）10時より副理事室にて，松浦副理事より，本プロジェクトの目的等について説明があった。

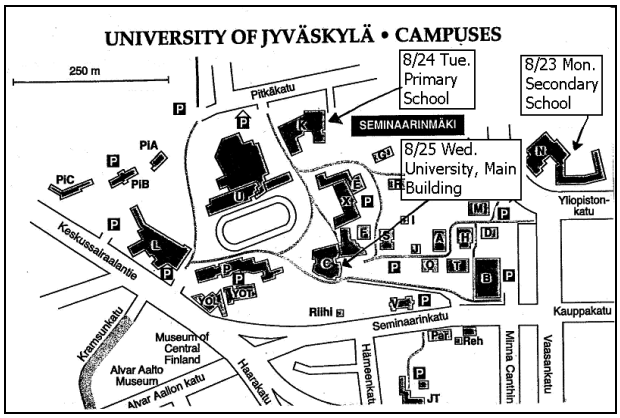
報告の概略

5. 調査方法

本調査は，ユヴァスキュラ大学とその教育実習校である Secondary School と Primary School を訪問し，担当者から教員養成に関する聞き取りと授業観察を行った。ただし，授業観察は選択科目の「英語」以外はフィンランド語によるものであったため，板書などを参考に教員や児童，生徒の観察を行った。（授業後，少しの時間，授業者と話をすることもあった。）

なお，観察対象は，調査チームの担当教科あるいは，興味関心のある教科で選択し，学年は時間割等の都合で選択することはできなかった。

また，今回学校が長期の休み明けということもあり，教育実習生が授業をしている様子を直接観察する機会は非常に限られていた。そのため，授業後の実習生への質問や配布された資料をもとに調査することとし，教育実習校としての施設および設備に関しては，附属の教員で気が付いた点をまとめることとした。



＊調査（訪問）した学校は，ユヴァスキュラ大学周辺にあり，徒歩で移動ができる距離にある。

6. 調査行程および調査概略

以下に，本プロジェクトの調査行程およびその概略を記す。

8月21日（土） 前泊（成田エアポートハウス）

8月22日（日） 成田→ヘルシンキ→ユヴァスキュラ

備考： 夕食は，ユヴァスキュラ大学の Dr. Markus Hähkiöniemi と会食

8月23日（月） Teacher Training School ＊Dr. Pekka Ruuskanen (Principal)

Teacher Training, Secondary School ＊Mr. Mika Antola (Math Teacher)

School Lunch ［Afternoon］, Lesson Observations, Discussion

＊学校の説明や教育実習の説明，スクールカウンセラーの存在は重要，壁の写真は…

＊教室の機器環境（OHC や Smart Board 等）が充実，授業は…

8月24日（火） Teacher Training School, Primary Education

*Mr. Markus Leppiniemi (Vice Principal)

Lesson Observations, School Lunch [Afternoon]

* Ms. Mari Kalaja (Teaching Practice Supervisor), Discussion

＊校内案内係は小学生，職員室は情報の共有空間，教育実習生は…

＊教室環境の充実，豊富な授業展開，スーパーバイザーの役割とは…

8月25日（水） University, Main Building

Teacher Education System in Jyväskylä

*Ms. Elisa Heimovaara (International Liason)

Teacher Education *Dr. Henry Leppääho, *Dr. Markus Hähkiöniemi

*Dr. Tiina Nevanpää (Head of the Department of Teacher Education)

＊本館は，フィンランドの建築家アルヴァアルトの設計，歴史・教育制度・教員養成の説明，時間が…

[Afternoon] ユヴァスキュラ→ヘルシンキ

8月26日（木） 帰国（関西国際空港）

備考： 本プロジェクトの詳細は，別紙報告書で行う。

成果と課題

今回の調査の目的であった「先進的な教育実習と教育実践研究に関して，信頼性かつ妥当性のある調査を実行すること」をどれだけ果たせたであろうか。現地で直接話を聞き，授業観察を行った。結果として，質の高い教員養成には，大学も附属も，互いに協力しながら，それぞれの役割を果たさなければならないということを肌で感じることができた。帰国後，いくつかの書籍や論文を読み返しながら，その思いは高まるばかりである。

なお，本調査は，平成 22 年度学長裁量経費の支援を受け実現できたものである。紙面を通じて感謝申し上げたい。

メモ

3. 教 育 研 究 部 会

			附属三原学校園
部会	教育研究部会	発表者	吉　原　智恵美
提案テーマ	幼小中一貫教育研究の推進		

内容の概略

（活動の目的と目標）

本学校園は，同一敷地内に幼稚園，小学校，中学校が併設され，12 年間の完全連絡入学制を採っている。この環境を生かし，平成 10 年度以降，幼小中 12 年間の子どもの育ちを視野に入れた一貫教育の在り方を模索し教育研究を推進している。一貫教育研究の必要性は，教育の連続性，一貫性への注目や少子化に伴う学校統廃合などを背景に年々高まりつつあり，本学校園の教育研究はそのニーズに応えるものでもある。ここでは，これまでの実績から，幼小中一貫教育研究推進のための具体的な運営・組織づくりについて提案する。

（活動の具体）

① 全教員による教育目標の共有

研究主題や子どもに身につけさせたい力といった研究を方向づける内容を決定する際には，全教員からなる**全体研究部会**を開催して討議を行っている。一貫教育を成立させるためには，幼小中の一人ひとりの教員が教育目標を共有し，同じ方向に向って教育活動を行う必要があるからである。教員の思いや各校種の独自性をふまえた討議を行う中で，研究の方向性が共有され，教員一人ひとりが学校園全体の研究に主体的に携わろうとするボトムアップの気運を形成することができる。

② 校種の独自性と連続性を大切にした研究推進体制

研究推進にあたってはプロジェクト制による複数の学習開発部会を設置し，それぞれの部会には幼小中の教員を縦割りで配置している。そうすることで，各校種の独自性，幼小中の連続性をふまえた討議がなされ，発達段階に応じた学習活動を開発することが可能になる。さらに，部会間の情報共有のために，月に一度，校園長，三副校園長，三教務主任，三研究主任，各部会のリーダー，研究アセスメント担当者による**研究開発委員会**を設け，情報の共有や部会間の調整を行っている。

③ 他校種への理解を深める保育・授業研究と合同・交流学習の開発

一貫教育を推進するためには他校種の教育観への理解が必要不可欠である。本学校園では，年度当初に保育研究・授業研究の年間スケジュールを共有し，校種を越えて相互に参観し合えるようにしている。また，校種の枠を越えての合同学習や交流学習を積極的に実施している。例えば，幼稚園年長児と小学校4年生の，人間関係力育成を目的とした交流学習は1年間を通じて行われる。交流学習の計画は保育者と授業者の討議によって立てられ，実際の交流場面では小学校教員が園児を援助したり，幼稚園教員が小学生を指導したりする姿が見られる。このような積み重ねの結果，互いの校種に対する理解が生まれ，12 年間の子どもの成長を視野に入れた教育が実現するのである。

④ 研究の提案性を高める大学教員などとの連携

一貫教育のパイオニアとして研究の成果を発信し続けるためには，絶えず外部の評価を得ながら研究の妥当性について検討を加える必要がある。そのため，学習開発を広島大学との共同研究に位置づけるとともに，県・市の教育委員会や他大学の先生方からなる**運営指導委員会**において指導助言を得る機会を設けている。

成果と課題

○ 教員間の交流，合同学習や交流学習の実施により，12年間の子どもの成長を視野に入れた教育活動がなされ，発達段階に応じた学習開発がなされた。

○ 全体研究部会により全教員が研究の方向性を共有できるようにしたことで，各学習開発部会において主体的に学習開発がなされた。

● 一貫教育に取り組み始めようとしている幼稚園や学校に対し，一貫教育の進め方を提言可能な形にして示す。

● 保育・各教科・各領域における目標設定，学習内容，指導方法の系統性を整理し，12 年間を通じての総合的なカリキュラムを開発する。

メモ

					附属幼稚園
部会	教育実習	研究	教育実践	発表者	久　原　有　貴
提案テーマ	「森の幼稚園」の保育プランの作成				

内容の概略

（活動の目的と目標）

本園は「森の幼稚園構想」を掲げ、自然の中で遊ぶことを通して幼児の育ちを支えていくことをめざしている。本年度はその実現のための“森の幼稚園の保育プラン”を作成することを目的として研究をすすめている。

（活動の具体）

以下の手順をふみながら、保育プランの作成を試みている。

① 保育プラン（カリキュラム）のとらえ方や考え方について、文献研究を行なった。そこから、幼児の姿と保育者の思いを重ね合わせていく“対話的な保育”を大切にしていくことを共通認識した。

② 毎月幼児の実態に応じて、森での保育を意識した指導計画を作成し、それを職員間で読み合い、ねらいの見直し、異年齢間の調整を行なった。

③ 指導計画に基づいて、保育を実践した。その際、「森の日」という１日中森の中で過ごす日を設けて実践した。その日には「森の達人」と呼ばれる自然の専門家を招いて、森での遊びを豊かに行うことができるようにしている。

④ 森での特徴的な姿をエピソードとして記録し、そのエピソードを職員で読み合い、その時期に大切な経験についてカンファレンスを行なった。

⑤ 森で見られた遊びや活動を記録し、そこから半年間の変容を見いだした。

（※②～④は毎月くり返した）

以上の方法で幼児の森での育ちを見ていくと、森での遊びの特徴として木登りやターザンブランコなどの「挑戦系の遊び」や、想像力を働かせて自然物を何かに見立てるような「見立て遊び」が多く行なわれていることが見いだされた。また、対話的な保育プランを作成するためには、「集い（全員活動）」の時間も大切にしていくことが必要であることが分かってきた。

成果と課題

記録をとり、職員間で頻繁にカンファレンスを行なったことにより、森での保育において大事にしたい保育観の共通認識が生まれてきた。また、森を中心とした保育を実践したことで、幼児の中に、従来には見られない想像力の育ちや挑戦する意欲の高まりが育っていることを実感することができた。

今後は、森で遊ぶことによって幼児の中に何が育っているのかをエピソードを収集しながら探っていく必要がある。さらに、その育ちは「森」という環境独自のものなのか、どのような環境でも可能だが森という環境の豊かさによって育ちやすいものなのかなど、「森」という環境のもつ意味を探っていきたい。そのことを吟味しながら、森の保育の有効性を生かした保育プランを作成することをめざす。

メモ

				附属東雲小学校
部会	教育実習　(研究)　教育実践		発表者	土　井　　徹
提案テーマ	授業力を高めるには？			

内容の概略	**（活動の目的と目標）** 授業力を高める。 **（活動の具体）** ・校内授業研究で授業づくりについて議論する（年間 13 回＋α）。 ・中学校の授業を参観し，授業協議会を行う（年間２回＋α）。 ・公開研究会で授業提案を行い，授業協議会を行う（年間３回）。 ・外部講師が本校の児童を対象に授業を実施。後，授業について語る会を行う。 （早稲田大学教授　露木 和男 氏　４年「もののあたたまり方」）
成果と課題	○これまでの授業とは違う授業が見られるようになってきた。 ○小学校５，６年と中学校１年の授業づくりに関する仮説ができつつある。 ●授業力の高まりをどう評価するか。

メモ

				附属小学校
部会	教育実習　(研究)　教育実践		発表者	立　石　泰　之
提案テーマ	共同研究における課題意識を喚起する研究の推進			

内容の概略

（活動の目的と目標）

○　本校は教科担任制をとっており、各教科部と共同して行う授業研究の企画・推進・整理を行う。

（活動の具体）

○　本校研究主題の提案

・今年度の研究主題の提案に伴い、主題をよりよく理解してもらうために研究部から四月当初に提案授業を行った。

○　自主研修会の開催

・今年度は少しでも多くの研修の場を設定したいと自主研修会を設定した。四月に広島大学の湯澤正通教授によるワーキングメモリについての研修会を行った。

○　新任者校内授業研究会オリエンテーションの開催

・今年度赴任された新任者の先生方に対し、授業研究会に向けたオリエンテーションを行った。また、必要に応じて指導案の検討の場を設けた。

○　校内研究授業における主題に関わる協議

・校内授業研究会において今年度の主題に関わる協議を行い、具体的な授業をとおして主題に対する共通理解を深めた。

○　授業反省記録の配付

・校内研究授業協議会後、授業者からの提案問題に対する考えや主題との関わりについてそれぞれの先生方に用紙に記述してもらい、全員に配付を行っている。

○　自主公開授業の開催

・学部附属共同研究授業等、授業を公開できる場合は先生方に呼びかけをする。

成果と課題

○　今年度は、年度当初に提案授業を行ったことで、主題に対する共通理解を概ね深めることができ、各先生方の日常の授業づくりのなかで意識をして実践することができた。

○　今年度は新たな試みとして提案授業、自主研修会の開催などを行ってきている。先生方からもいい評価をいただいているので、より多くの充実した研究・研修の場を提供できるようにしたい。

○　校内研究授業協議会において具体的な授業をとおして主題との関わりについて話し合いを行い、また授業反省記録でそれぞれの先生方の主題に対する考えを述べてもらうことで共通理解を深めることができてきている。

◆　校内研究授業協議会においてより焦点化された議論が行えるよう進行していく必要がある。

メモ

					附属東雲中学校
部会	教育実習	研究	教育実践	発表者	檜和田　祐　介
提案テーマ	義務教育における学び文化の創造－つながる学びを育む授業づくり－				

内容の概略

（活動の目的と目標）

本校では，同一敷地内に隣接する広島大学附属東雲小学校と連携し，「義務教育における学び文化の創造」をテーマに，義務教育段階における授業づくりの在り方を探ることを目的とし，研究を開始した。中学校は歴史的に見ると小学校から大学をつなぐ「前期中等教育」の役割をもち，さらに，高等学校に送り出す「後期義務教育」として義務教育の仕上げの時期である。今日の社会は急速に変化していき，それに伴い義務教育段階で育てる資質や能力の問い直しが求められている。全国では小中連携教育や一貫教育を推進しているモデルも見られるが，それらはハード面に工夫を凝らしたものが中心であり，児童・生徒のどういう資質・能力の育成が必要かは問われていない。そこで，義務教育の学びそのものを問い直し，小中連携教育を方法として新しい視点を取り入れた授業づくりの在り方を探ることが何よりも重要であると考える。

（活動の具体）

児童・生徒の発達段階を考慮し，義務教育９年間をⅠ期（小学１年生～小学４年生）・Ⅱ期（小学５年生～中学１年生）・Ⅲ期（中学２年生～中学３年生）に分け，それぞれの段階におけるめざすべき学び文化を創造する授業づくりの視点を模索する。

Ⅱ期では「授業展開に焦点をあてて」というテーマを設定し，具体的思考から抽象的思考に続く過渡期の段階での授業展開に焦点を当て，生活的概念から科学的概念へのスムーズな移行ができるような指導の在り方を検証する。Ⅲ期では「概念の深化をめざした授業構成と教材の工夫」をテーマとし，生徒のより深い理解をめざした授業構成や教材の工夫に焦点をあてた授業づくりの在り方を検証する。このことは「思考力・判断力・表現力」という高次の学力を高めていく指導にもつながる。特別支援教育，学校保健においては，学年による区分を設けずに，生徒個々の発達に応じた指導を行うこととした。これらの研究活動を年間300回以上の授業研究・授業観察やカンファレンス（授業協議会），小学校との合同研修会を通して研究主題に迫っていく。

成果と課題

＜成果＞

○日々の授業公開や授業カンファレンス，小学校との合同授業研究により，教科の枠を超えた協議を行うことができ，授業づくりの視点を考えることができた。

○研究会を11月6日（Ⅲ期）と11月19日（Ⅱ期）に行い多方面から参加者を迎え盛会のうちに終えた。特にⅡ期の研究会では小学校と合同で行い，小学校・中学校が授業の在り方を提案した。

＜課題＞

○本テーマでの研究がまだ１年目のため，教科・領域により認識の違いが見られるので，全体で意見を共有しながら研究を推進していく必要がある。

メモ

					附属中・高等学校
部会	教育実習	研究	教育実践	発表者	平　松　敦　史
提案テーマ	スーパーサイエンスハイスクール（SSH），及びコア SSH の取り組み				

内容の概略

（活動の目的と目標）

SSH 研究開発課題

『持続可能な開発』に創造的に取り組む科学者・技術者を育成する教育課程の創造

コア SSH　研究開発課題

持続可能な開発のための創造力育成をねらいとした科学授業モデルの日独韓共同開発

（活動の具体）

〇創造性を養うプログラム

先端科学における創造性を学ぶプログラムとして，「特別講義」，「研究室訪問学習」，「研究実践学習」，「サイエンスツアー」また，「課題研究」，「各教科における創造性を育む教育研究」を行っている。

〇国際力を身につけるプログラム

高１から高２の春休みに実施している海外研修にＥＳＤプログラムを取り入れ実践している。また昨年度はＳＳＨの重点枠事業が採択され，ドイツのベルリン市，またザクセン市に赴き，バイオマスエネルギーを素材とした科学授業モデルを実施した。さらに，本年度はコアＳＳＨ事業が採択されたので，韓国の先進科学高校と連携し，新たに開発した科学授業モデルを韓国と本校の高校生とが共同して実践した。また，新たな科学授業モデルを開発し，韓国から高校生を本校に招待し実践する予定である。さらにドイツに赴き，ＡＳＰネット校と協力したＥＳＤ教材開発，また，科学授業モデルを実施する予定である。

〇地球規模で考えるプログラム

学校設定科目「サイエンスコミュニケーション」，「宇宙・地球科学」，「生命科学」，「数理解析」を新たに設定し，選抜した高校２年生１クラス（SS クラス）に実践している。また，ＥＳＤの内容開発として，環境，社会，文化の視点から捉え直した教材を実践している。

成果と課題

生徒，保護者，教職員へのアンケート結果から，生徒に対しては，自己効力感が高い，科学を学習する価値を認識している，といった効果が得られていることが確認された。また，保護者は，「理科・数学に対する能力やセンス向上に役立つ」といった好意的な受け止めがなされている。また，教職員ではＳＳＨ活動がより効果的になってきている，との認識が高まっている。

課題として，従来実施してきた内容をよりインテグレートした取り組みが求められる。例えば，ＥＳＤを科学・技術の視点のみならず社会科学の視点を更に取り入れたり，他の領域との共同授業コンテンツを開発したりすることである。さらに，得られた知識を活用する能力を育成する機会を与える授業モデルとして，実際に産業社会で行われている事業とリンクした内容の開発などが考えられる。

メモ

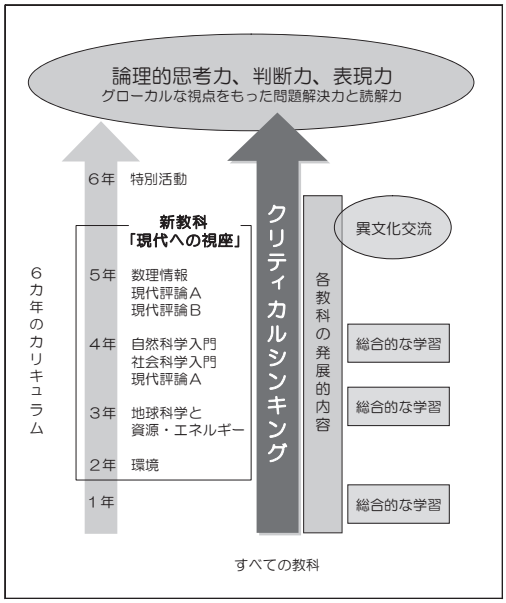
					附属福山中・高等学校
部会	教育実習	研究	教育実践	発表者	山 下 雅 文（研究部長）
提案テーマ	全教科で取り組む文部科学省研究開発学校 「クリティカルシンキングを育成する中等教育 教育課程の開発」				

内容の概略

（活動の目的と目標）

変動する現代社会の中で，的確に問題を発見し，解決に向けて主体的に取り組み，持続可能な社会を構築する人材を育てるためには，基礎的素養やコミュニケーション力を育むとともに，物事の本質を見抜き，思考・判断するクリティカルシンキングの視点の育成が重要であると考えます。当校では，文部科学省 研究開発学校の指定（平成 21～23 年度）を受け，クリティカルシンキングの視点を柱に据えた系統的カリキュラムと指導方法の研究開発に全教科で取り組んでいます。

※当校では「クリティカルシンキング」を，「適切な規準や根拠に基づき，論理的で偏りのない思考」，「よりよい解決に向けて複眼的に思考し，より深く考えること」と捉えています。



（活動の具体）

クリティカルシンキングを育成するための柱となる新教科として，「現代への視座」を創設しました。これに加え，総合的な学習の時間，既存の各教科の単元開発などを通して，すべての教科で取り組む系統的なカリキュラムづくりを行います。

平成 21 年度は，新教科「現代への視座」の教材開発，および年間計画作り，総合的な学習や教科の発展的取り組みの開発および試行を行い，教材の妥当性について調査しました。その際，各取り組みで，「どの場面でどのようなクリティカルシンキングを育むのか」について具体例をまとめました。平成 22 年度はさらに教材開発を進めその充実を図り，実践を行っています。また，生徒の変容を捉えるために，クリティカルシンキングを測る調査問題を作成し，カリキュラム評価につながる研究を行っています。

成果と課題

初年度の研究開発を通して，クリティカルシンキングの具体とそれを育む教育課程を提案することができました。試行を受けての生徒の意識調査からも，生徒が興味・関心を持って取り組み，新しい視点の習得・活用や表現力の育成に各科目および総合的な学習の時間が相補的にはたらくことが伺えました。今後，教材の吟味や改善などを通して，より効果的なものにしていく予定です。また，「クリティカルシンキングの評価問題」の妥当性を高め，カリキュラム評価を行うとともに，他校でも実践できる教材の提案へとつなげていきたいと考えています。

メモ

4. 教 育 実 践 部 会

				附属東雲小学校
部会	教育実習　研究　(教育実践)		発表者	梶　山　雅　司
提案テーマ	特別支援学級とともに進める交流及び共同学習			
内容の概略	**（活動の目的と目標）** ・障害がある児童とない児童が，かかわりの場をとおしてお互いを理解し，ともに生活を創っていくことができるようにしていく ・小学校特別支援学級児童と中学校特別支援学級生徒との共同学習をとおして自分の成長やその過程のイメージをもつことができるようにする **（活動の具体）** ・「縦割り活動」におけるグループでの活動及び日々の清掃活動 ・「学年活動」における早朝活動やＰＴＣ等の学年単位の活動 ・「学年宿泊学習（第３学年以上）」における事前学習及び宿泊学習の実施 ・中学校特別支援学級との交流			
成果と課題	○　特別支援学級の児童は，自分たちの学級以外の大きな集団の中で，活動を体験したりかかわったりすることで自信をつける ○　学年が上がるごとに他学級の児童は特別支援学級の児童を「障害のある」という捉えではなく一人の友だちとしてとらえている ○　中学校特別支援学級生徒との交流で，児童が進路の見通しをもつこと，生徒が中学生になった自覚をもつこと ●　特別支援学級児童と通常学級児童との活動のペースの違いのとらえ方 ●　特別支援教育における小学校から中学校へのスムーズな移行のあり方			

メモ

					附属三原小学校
部会	教育実習　研究　(教育実践)			発表者	小早川　善　伸
提案テーマ	校外班編成（地域別児童会）				
内容の概略	**（活動の目的と目標）** ○　同じ地域に住む子どもや保護者同士が顔見知りになることで，お互い声を掛け合い，地域で安心・安全に生活できるようにする。 ○　通学路や通学方法，休日の遊び場や110番の家などについて交流することで，安心・安全に通学したり，地域で生活したりできるようにする。 **（活動の具体）** 【事前活動】 ○　校外班別名簿・地図を作成する。（教員） ○　110番の家，お店などのマークを確認する。（教員） ○　地域での危険な場所や気になることなど保護者の意見を収集する。（教員） ○　校外班の６年生と１年生との事前顔合わせをする。 【当日（日曜保護者参観日）】 ①　親子で一緒に自己紹介（学年・名前・住所など） ②　通学路・通学方法・110番の家・地域の危険な場所などの確認・交流 【事後活動】 ○それぞれの地域で挙がった課題の中で，学校全体に関係のあることをまとめる。				
成果と課題	○　地域の保護者同士のつながりができ，お互い声を掛け合う雰囲気ができた。 ○　110番の家や通学路の危険な場所を確認できたため，保護者・教員とも共通認識の基，子どもたちへの声賭けができるようになった。 ○　子どもたちが危険な場所を意識して，登下校ができるようになった。 ●　毎年，年度初めの１回のみの活動であるため，防犯意識を高める活動を継続したり，さらに取り組みを深めたりすることができていない。 ●　通学範囲が広範囲で通学方法や通学路が様々であるため，班編成を組むことが難しい。				

メモ

				附属小学校
部会	教育実習　研究　(教育実践)		発表者	青　山　之　典
提案テーマ	「自主・協同・探究」の精神を育み鍛えるための活動の推進			

内容の概略

（活動の目的と目標）

○　本校は教科担任制をとり、各教科が先進的な指導を行っている。その中で児童に「自主・協同・探究」の精神を育み鍛えるための活動を推進することを目的としている。

（活動の具体）

○　教科担任制

・各教科が教科研究部をつくり、先進的な教育実践を行い、研究を進めている。

○　特設単元委員会

・特設単元委員は、副校長、教務部、他必要に応じたメンバーとする。

○　児童会活動

・児童総会・・・児童会のテーマについて、意識づけることを目指している。また、各委員会から活動計画が出され、４年生以上の児童が質問・意見を述べる場が確保されている。

○　通学班会

・年３回行っている。（４月、１０月、３月）

・通学区が広いため、１４の通学班をつくり、各地区の実情に合わせた指導を行っている。交通機関の利用マナー、交通安全、礼儀、身だしなみなど。保護者による、地区会も組織されており、通学班に連動し、支援を行っていただいている。

○　登下校指導

・登校指導・・・８月を除く、各月始めの日に行っている。学校最寄りの電停付近にて、電車・バスの降り方、横断歩道の渡り方、歩道の歩き方、挨拶・身だしなみについての指導を行っている。

・下校指導・・・全校一斉集団下校（年３回）、生活指導部にて決めた下校指導日に行っている。安全な自力下校のための指導を行っている。

※　特に、低学年児童にとっては、大変重要な指導になっている。

成果と課題

伝統的に、児童の主体的な学校生活が営まれていることが最大の成果である。広い通学区から自力で登下校するといった力が低学年のうちから養われ、高学年では児童会活動をとおして、学校運営に主体的に関与していくことで、自ら考え、自ら行動する気風が自然に身についてきている。また、特設単元委員会は小回りの利く適切なメンバーで運営されており、より効果的に実態にあった活動を推進することができている。このように、児童に「自主・協同・探究」の精神を育み鍛えることで、各教科の指導が効果的に行われるための基盤づくりになっている。

しかし、子どもを取り巻く環境は日々変化しており、安全指導には大変気を遣うことが多い状況である。適切に状況を把握し、必要な指導を行っていく必要がある。

メモ

				附属東雲中学校
部会	教育実習　研究　**教育実践**		発表者	松　村　　健
提案テーマ	国際理解・異文化理解を深める国際交流プログラムについて			

内容の概略

（活動の目的と目標）

国際交流活動を通して，異なる文化や考え方を受け入れ，理解しようとする意欲の向上を図る。

（活動の具体）

５月　インドネシア MENDOYO との来日交流（２日間）

・MENDOYO4 生徒の通常授業参加

・３年総合学習における意見交流（日常生活，学校生活に関して）

・MENDOYO4 生徒による民族舞踊の鑑賞（ガムランなど）

５月　アメリカ　Odyssey School との来日交流（４日間）

・Odyssey 生徒の通常授業参加

・３年総合学習における学校紹介（東雲憲章と Odyssey　ZEN についての比較）

・Odyssey との協働活動（ｳｫｰｸﾗﾘｰ）と Odyssey の授業体験（ｼｪｰｸｽﾋﾟｱ）in 宮島

８月　アメリカ　Exploris Middle School（以下 EMS）との渡米交流（１０日間）

生徒）・文化紹介（ふくわらい，駄菓子の紹介，かるた）

・Research question（日本人とアメリカ人のものの考え方について）

３月　アメリカ　EMS との来日交流（９日間）予定

MENDOYO4 中学校

Odyssey School

Exploris Middle School

成果と課題

生徒は，互いの文化の違いに触れる交流活動をとても楽しんでいる。国や人種を越えて人を人として受け入れて，互い理解しようとしていることが伺える。同時に，うまく伝えることや相手の思いを理解することの難しさも実感している。次の交流に向けて，もっと英語を話せるようになりたい，英語を聞き取れるようになりたいという感想が多く，英語学習により意欲に取り組む姿が多くなってきている。

交流活動が東雲中学校だけにとどまっているので，今後は広島市内の中学校と共同して活動するような試みを模索していき，国際理解・国際交流の輪を広げていきたい。

メモ

			附属三原中学校
部会	教育実践	発表者	藤　井　志　保
提案テーマ	地域の高齢の方との交流学習		

内容の概略

（活動の目的と目標）本校の家庭科教育においては，幼小中一貫の教育力を生かし，異年齢交流など小学校までに学んだ内容を基盤として，それを継続発展させる取り組みを行っている。中学１年生で「地域の高齢の方との交流会」を家庭科を中心とした総合単元として実施している。本題材では，家庭科における「食」の学習にとどまらず，子どもたちが自分をかけがえのない存在としてケアし，そして他者を尊重し，他者からのはたらきかけに応答し，互いを認め合う「開かれた個」同士の結びつきとしてのケアリング関係を築くことをめざしている。この活動を通じて，他者の立場に立ち思いやりをもちそれを行動化し，これからの生き方につながる活動とすることを目的としている。

（活動の具体）地域の高齢の方を班に一人お招きし，一人一品責任を持って調理し，班で四品一食分の食事を作ってもてなし，交流を深めている。既習の栄養に関する基礎的な知識を生かし，地域の食材を生かした栄養バランスのとれた高齢者向きの献立を作成し，試し作りも行い，調理の工夫をしている。家庭科だけでなく総合学習の時間に「創造的問題解決能力」を育む取り組みとして，問題解決のステップについて学び「お客様に喜んでもらえる会にするにはどうしたらよいか」という「問い」を子どもたち自身が考え，それに対する解決アイデアを出し合う思考方法を取り入れ，子どもたちの心情面を深めている。高齢の方とのコミュニケーションについて本番を想定したシミュレーションを行い，交流会ではどんな力が必要かを子どもたちが自ら気付けるよう取り組んでいる。

成果と課題

７年目になる取り組みで，毎年改善して行っているため，事後アンケートでは満足している子どもがほぼ全員になった。「誰かのために何かをして喜んでいただき，相手の喜びが自分の喜びにつながる」経験ができている。また，ケアリング育成の４つの方法「モデリング」「対話」「実践」「確証」を援用したことも効果的であった。「実践」の場である交流会では，総合学習の時間に学習したコミュニケーションについての学びを生かせた。また，高齢者の方からのお礼の手紙でも，自分たちの行為が受け入れられていることを「確証」することができている。このように「食」を通じて，ケアする側とケアされる側が共感的にかかわる体験は，現代の少子高齢化社会の中で人と人とのかかわりが希薄になりがちな地域に生活する子どもたちにとって大変貴重な学習である。

しかし，本校でも子どもたちの家庭での生活体験も年々低下傾向にあり，授業時数が少ない家庭科の時間だけでは目的を達成するための取り組みが困難である。

メモ

			附属中・高等学校
部会	教育実践	発表者	藤 原 隆 範
提案テーマ	ＥＳＤのカリキュラム開発－ユネスコ・スクールとしての実践－		

内容の概略

（活動の目的と目標）

1953（昭和 28）年に，世界で最初に指定されたユネスコ協同学校（現在の呼称はユネスコ・スクール）として，ユネスコの主導するＥＳＤ（持続可能な開発のための教育・持続発展教育）をすすめるとともに，ユネスコ・スクールとしての教育実践を行う。

（活動の具体）

① 各教科や「総合的な学習の時間」で，ＥＳＤの教材開発をすすめ，ＥＳＤの授業づくりを行っている。

② 中学校の「道徳」「学級会活動」，高校の「ホームルーム活動」の時間をつかってＥＳＤに取り組み，「戦争と平和の問題」・「人権問題」・「環境問題」・「南北問題」などを取り上げ，「持続可能な社会」をどうつくるか考えさせている。

③ 高校生徒会にユネスコ委員会をおき，委員会の活動として，使い古した運動靴を集めてアフリカに送ったり，「使用済みカード」・「古切手」・「書き損じはがき」などを収集して，発展途上国の医療や教育を支援している。

④ 学校行事である文化祭や体育祭では，生徒会や学校祭運営局を中心に，ゴミを減らす，電気・水道の無駄な使用を減らすことを呼びかけ，生徒全員にエコの精神を涵養している。

⑤ 課外活動（クラブ活動）としてユネスコ班は，広島ユネスコ協会の主催行事「平和の鐘を鳴らそう」でメッセージを読んだり，街頭募金に協力したり，日本ユネスコ協会連盟の主催するユースセミナーやスタディツァーに参加してユネスコ精神を学び，それを校内に還元したり，校外に発信したりしている。

⑥ ユネスコ班は，2011 年１月 19 日～26 日にドイツ・カールスルーエのユネスコ・スクールを訪れ，ドイツのユネスコ・スクールとの交流プログラムを開発する予定である。

★ ①～⑥の活動を通して，学校全体としてＥＳＤの精神を培い，それを踏まえてＳＳＨ事業を行っている。本校のＳＳＨの研究開発課題は，「『持続可能な開発』に創造的に取り組む科学者・技術者を育成する教育課程の研究」である。

★ ①～⑥の研究成果は，中等教育研究大会や研究紀要，学部附属共同研究紀要，ＳＳＨ報告書，ユネスコ・スクール全国大会でなどで報告している。

成果と課題

ユネスコ・スクールの草分け的存在として，ＥＳＤに先進的に取り組んできた。その成果は，それぞれの分野ではあがっていると感じられるが，教科学習と特別活動，課外活動とを，どのように有機的に結びつけ，組織的体系的なＥＳＤにしていくか，課題は残っている。また，来年１月に生徒をドイツのユネスコ・スクールに派遣し，ドイツのユネスコ・スクールとの交流事業に着手する。今年度はＳＳＨ事業の一環として行うため，派遣費用が捻出されたが，来年度以降はその保証はなく，定期的・恒常的な交流を考えたとき，財政的な裏付けがどうしても必要である。

メモ

			附属福山中・高等学校
部会	教育実習　研究　〇教育実践	発表者	林　　靖　弘
提案テーマ	学友会指導について		
内容の概略	（活動の目的と目標） 自己指導能力と自治の力を身につける。 （活動の具体） 　学友会（生徒会）の活動は特別活動の１つに位置づけられる，自発的，自治的な実践活動を通して，自主的な態度の在り方を学ぶ教育活動である。学友会の主な活動内容は，クラブ活動にともなう費用の会計処理や，広報誌の発行といった日常の業務，体育祭，学友祭（文化祭）などの行事の運営である。この行事の運営能力が，年を追うごとに低下してきている。行事の運営にあたって，生徒は過去の資料をもとに綿密なマニュアルを作り上げる。初版から，何度も手直しをして最終版まで，仕事を細分化して個々の係員に割り当てていく。しかしながら，往々にしてマニュアルの世界で自己完結してしまい，指導に当たる教員が指摘しても，問題点をなかなか理解できない。結果，フェイルセーフを忘れていたり，不測の事態に柔軟に対応できなかったりする。想像力の欠如。行事の流れを頭の中で組み立てていくことができないのである。実は事態はまったく逆で，融通をきかせた対応ができないから，マニュアルに執拗にこだわるとも言える。いずれにせよ，集団を動かすという実体験が圧倒的に不足している。		
成果と課題	オリーブ祭（新入生歓迎会）から始まって，体育祭，学友会総会（生徒総会），学友祭と，いくつもの行事を運営していくなかで，運営能力＝集団の動きを想像する力が身についていく。運営のコツを身につけていく。効果的な方法などはなく，生徒は失敗を繰り返しながら，指導にあたる教員は問題点を考えさせたり，指摘したり，時には活動を支援したりしながら，地道に行事を行なっていくしかない。学友会本部と呼ばれる運営集団は中学生から５年生（高校２年生）まで，多学年に及んでいるが，中核となるのはやはり５年生である。彼らは５年を最後に引退していくため，中枢における活動はどうしても単年度となる。生徒同士での運営方法の引継ぎをどのようにしていくかが課題である。		

メモ

			附属三原幼稚園
部会	教育実践	発表者	中　山　芙充子
提案テーマ	留学生との交流～いろいろな人とかかわる力の育成をめざして～		

内容の概略

（活動の目的と目標）

本園では、年間を通して広島大学の留学生との交流を取り入れている。この交流の目的は、幼い頃から国や文化、慣習の違いや言葉の違いに関係なく、思いが伝わる喜びや一緒に遊ぶ楽しさを体験し、いろいろな人に慣れ親しむことで、これからのグローバル社会で生きていくために必要な国際的コミュニケーション能力の芽生えの育成を図ることである。そして交流を通して、子どもたちに、自国・他国の文化や人に出会うことに楽しさを感じながら、自分なりの方法で積極的にかかわろうとする力を培うことを目標としている。

（活動の具体）

留学生交流では、日常の保育の自然な流れの中で子どもたちと留学生が一緒に遊ぶ楽しさを味わう活動と、「七夕まつり」や「お月見茶会」など日本の文化に一緒に親しみ楽しさを味わう活動がある。その際、留学生に外国の絵本を母国語で読み聞かせてもらったり、留学生の母国の様子や歌などを聞いたり、母国のゲームを一緒にしたりすることで、子どもたちが外国の文化ふれることに楽しさを感じ、興味をもつことができるようにしている。また、留学生と子どもたちが同じ場所で過ごす心地よさを味わうことで、無理なく留学生と一緒に過ごすことができるようにすることや教師が留学生に対して自然なかかわりをすることで、子どもたちが安心できる雰囲気にすることなどに留意して活動を行っている。

成果と課題

成果としては、ありのままの日常の保育の中に留学生に入ってもらったり、教師が留学生に自然に親しんだりすることなどによって、子どもたちが安心して自分からかかわる姿が見られるようになった。また年間を通した交流を毎年継続してきたことで、子どもたちは自分から留学生にかかわろうとし、自分たちの好きな遊びに誘ったり幼稚園のことを話したりする姿が多く見られるようになってきた。そして留学生の出身国の文化にふれることで、国によって慣習や文化が違うことに興味をもったり、違う文化があることもよさを認め、受け入れられるようになってきている。

課題としては、留学生の母国が一部の地域に偏っているので、子どもたちがより世界の広さを感じられるように、様々な国の方に交流に来ていただけるようにしていきたい。また、留学生も活動しやすいように配慮しながら、双方向にかかわりを深めることができるようにしていく必要がある。

メモ

				附属幼稚園
部会	教育実習　研究　(教育実践)		発表者	松　本　信　吾
提案テーマ	「森の幼稚園」の保育実践			

内容の概略

（活動の目的と目標）

本園は「森の幼稚園構想」を掲げ、一日中森の中で過ごす「森の日」を週１回以上設けるなど、「森の幼稚園」を目ざしている。森で遊ぶことと通して、豊かな感性や、知的好奇心、身のこなしなどを体得し、本園の教育目標である「心豊かに生きる力を育む」ことをめざして、日々の実践を行っている。

（活動の具体）

・「森の日」の実践

一昨年度より、登園時から保育室に入らず、一日中森の中だけで過ごす「森の日」を週に１，２回程度行っている。さらに本年度より、自然と触れ合う楽しさや自然からのメッセージを伝えるインタープリターとしての「森の達人」を非常勤講師で招き、保育者と一緒に「森の日」を行っている。達人に食べることのできる草花を教えてもらい実際に食べたり、木を切ってきて自分たちの家やはしごを作ったり、五感を働かせたネイチャーゲームを行ったりなど、今までにない自然との出会いや気付きが生まれている。

・挑戦する遊び

本園では、子どもたちを危険から遠ざけるのでなく実際にやってみることを通して、危険を回避する身のこなしを体得することや、できるようになる充実感を味わうことを目ざしている。木登り、ターザンブランコ、綱渡りなど、自分の体力と勇気の限界まで挑戦する遊びが頻繁に行われ、子どもたちは『怖いけどやってみたい』という気持ちを味わいながら遊んでいる。

・自然物を用いた遊び

森の中では、既存の遊具がないために、木切れや葉っぱなどの自然物を見立てながら遊ぶ姿が頻繁に見られる。現代の子どもたちは既成の遊具などがないと遊びにくくなっていると言われているが、本園の子どもたちはそれらのものが無くても、自由に自然物を見立てながら遊ぶようになっている。しかし、そのようになっていく過程は簡単ではなく、保育者がファンタジーの世界を語ったり、森の達人が自然物の楽しさを伝えたりすることで、子どもたちは徐々に見立てた遊びを行うようになっている。

・森からもらった物語

本園の森には、語り継がれている物語がいくつかあった。それらを職員が「森からもらった物語」としてまとめ、子どもたちに語り継ぐことを行っている。その物語には、魔女の“ルカ”や、ゴリラのようなおばけの“ゴーリー”が登場するなど、ファンタジーの世界に満ちている。そのような物語を、実際に森に入って少し怖い異次元の世界の中で聞くことで、子どもたちはファンタジーの世界をリアルに体験しており、日々の遊びや生活の中でも、新たな物語を創造している。

成果と課題

保育室から森を中心とした保育にシフトしたことで、**①自分の限界までくり返し挑戦しようとする子どもが増えた　②ファンタジーの世界を楽しむ子どもが増えた　③身のこなしが格段によくなった**　などのことを、保育者として実感している。

今後、森の保育を通して育つものを具体的な子どもの姿から描き出すことで、幼児期に大切な体験を発信していくことが課題となる。同時に、森での保育を系統的に行うための、「森の幼稚園カリキュラム」を作成することが必要である。その中では、従来の保育内容の取捨選択を行いながら、新しい保育の形を創造していくことが求められるだろう。

メモ

分　科　会　報　告

〇教育実習部会・・・・・附属東雲中学校　瀬川　啓子

〇教育研究部会・・・・・附属東雲小学校　岡田　　泰

〇教育実践部会・・・・・附属三原中学校　松尾　砂織

分科会記録（教育実習部会）

「附属学校園の教育実習が目指すもの」というテーマで，各学校園における教育実習の実際について発表した。各校園の特徴ある実践の概要を以下にまとめた。

1　附属東雲小学校「教育実践者としての基盤形成に重点をおいた実習」

教育者としての全人的陶冶を目標としている。指導案検討日を設定し，教育実習期間を第Ⅰ期・第Ⅱ期に分け実習を行っている。グループでの活動を重視することで，実習生同士の互いの人間関係を深め支え合いながら仕事に携わることの意義を実感させることができる。また，社会人としての一般常識に対する指導も重視している。

2　附属三原小学校「公立学校への訪問および授業観察」

教育実習生が本校と異なる教育現場を参観し，豊かな教育経験を積むことで，今後の実習に生かすことができるようにすることを目標としている。複式学級の授業の参観や公立学校の実態やそれに応じた授業の工夫などを観ることができる。公立小学校の教員と授業について交流し，学校経営や学級経営について学ぶことができる。

3　附属小学校「カンファレンス的な学びを取り入れた教育自習」

教育実習生に対しカンファレンス的な学びを取り入れることにより子どもについて表層的な理解だけに終始させるのではなく，自己吟味させ，より深層的な理解へと導くことを目的としている。このアプローチを学級反省会において実践した。学生が子どもを多面的な視点から見る様子がうかがえ，自己吟味により子ども理解へと導くことが可能であると思われる。教師間の連携を緊密にする必要がある。

4　附属東雲中学校「生徒と関わる時間を大切にし，授業改善に活かす実習指導」

責任ある教育活動を営むことができる実践力の習得を目的としている。生徒の実態を把握することに意識をもって指導案を作成することは目標が明確な授業づくりにつながる。可能な限り生徒と実習生が関われる時間を多くもち，生徒との関わり方やその重要性を認識させている。また，現場の状況を実感でき，教師としての意識が高まり，その責任の重さを実感させることができる。しかし，現状では時間不足な場合もある。

5　附属三原中学校「生徒理解・生徒指導と教科指導を２本柱とする教育実習の実際」

教科指導の実習のみにとどまらず，現場教職員の勤務に少しでも近い勤務状態の実習を実現し，教科指導と生徒指導は常に表裏一体の関係にあることを意識させながら教育実習を行い，実習生の教職に対する基本的な姿勢を確立させ資質を高めることを目的としている。生徒の立場に立った授業の構築，生徒の実態を考慮した指導案づくり等，失敗を経験しながらもやりきっているが，メンタル面でのサポートの必要性を感じる。

6　附属中・高等学校「本校の教育実習について」

教科を中心に中高ともＨ・Ｒ指導に力を入れている。実習生は教科指導にほぼ満足して

いる。今後指導体制として，一人の教員が担当する適正な人数の検証，３年生の教育実習にあたり大学でのカリキュラム整備が必要である。２学期の日程が過密になることが課題である。

７　附属福山中・高等学校「教育実習における合宿生活の有効性について」

自治運営の共同生活を通して，苦楽を共にしながら，互いに支え合うことの大切さを体感し，他者へのまなざしの意味を自らに問いかけることを目的としている。実習生同士がコミュニケーションを図ることで実習の基礎になる体験をすることができる。グループにリーダーがいるかいないかでグループの質に差がでる。

８　附属三原幼稚園「実りを実感できる教育実習の実際」

幼児教育を具体的に体験させることで，今まで習得してきた教育の理論と理解をより深めさせると共に，教育技術，実践的指導力の習得をはかり，教育者としての精神と資質を向上させることを目的とする。部分実習と全日実習の両方を実習生全員ができるようにしている。事後指導を充実させ，教師間で交流し指導内容の質を高める。教師間の交流の時間の確保や内容の改善が必要である。

９　附属幼稚園「幼稚園教育実習の実際について」

幼児教育を具体的に体験することを通して，今まで習得してきた教育の理論と理解をより深めさせると共に，教育技術，実践的指導力の習得をはかり，教育者としての精神と資質を向上させることを目的とする。幼稚園の教員を希望する学生は少ないが，幼児の実態を知り幼児に対する理解を深める経験につながっている。しかし，２週間という短い期間の中では実態把握も難しく保育実践や指導の充実が必要である。

10　平成22年度海外調査プロジェクト

「アメリカ」

附属学校に関する中期目標を達成するため，Indiana University（IU）と San Francisco State University（SFSU）を訪問した。先進的な教育実習と教育実践研究に関して，信頼性かつ妥当性のある調査を実行し，本学のシステムの見直しをするための一助とする。日米の比較から，実習生の人数，大学と附属の連携などの指導体制，指導内容，実習期間などを検討し教育実習の充実をはかる必要がある。また，教員養成をめぐる国内の新たな動きにむけて教育実習生の資質向上をどうはかるとよいかが課題である。

「フィンランドにおける教員養成に関する調査報告」

附属学校に関する中期目標を達成するために，世界的観点から教員養成を行っているフィンランドの大学ならびに教育実習校訪問し，先進的な教育実習と教育実践研究に関して，信頼性かつ妥当性のある調査を実行した。その調査を踏まえて本学のシステムの見直しをするための一助とすることを目的とする。調査結果から，質の高い教員養成には，大学も附属も互いに協力しながらそれぞれの役割を果たさなければならないことが実感できた。

分科会記録（教育研究部会）

「公立学校園とは異なる附属学校の特徴を生かした研究の推進とその発信」というテーマで，各学校園が進めている研究を発表した。その概要を以下にまとめた。

1　附属三原学校園「幼小中一貫教育の推進」

幼小中１２年間の一貫教育推進のために，全教員で教育目標を共有し，校種の独自性と連続性を重視した研究体制での研究を行っている。１２年間の子どもの成長を視野に入れ，保育・授業研究を合同で行ったり，交流授業を行ったりという具体的な取り組みが報告された。その結果，全教員での研究の方向性が共有でき，発達段階に応じた学習開発ができた。今後は１２年間のカリキュラム開発を目指し，保育・各教科・各領域における目標設定，学習内容，指導法の系統性を整理していく。

2　附属幼稚園「森の幼稚園の保育プラン作成」

自然の中で遊ぶことを通して幼児の育ちを支えるための「森の幼稚園構想」を掲げ，保育プランの作成に取り組んでいる。作成にあたっては，対話的な保育を大切にするとともに，児童の実態に応じた指導計画を作成した。実践された保育では，「森の達人」と呼ばれる自然の専門家を招いて森での遊びを豊かに行ったり，特徴的な姿を記録してカンファレンスに活用したりした。その結果，木登りやターザン遊びなどの「挑戦的な遊び」や自然物を何かに見立てる「見立て遊び」が多く見られるようになった。森を中心とした保育を通して，想像力や挑戦しようとする意欲が高まったと考える。更に，「森」という環境のもつ意味を継続して追究していきたい。

3　附属東雲小学校「授業力を高めるには」

教師の「授業力」を高めるための取り組みを行っている。「授業力」とは１単位時間の授業を創る力と考えており，児童の実態把握から適切な目標を設定し，授業実践，授業分析，そして，次の授業づくりに生かす力と定義づけている。その具体的な取り組みとして，校内授業研の持ち方，小中での合同授業研，公開授業，外部からの講師を招聘しての研修会などがある。視点を明確にして授業を創ったり観たりすることで，授業の質が高まったが，その高まりをどう評価するかが今後の課題としている。

4　附属小学校「共同研究における課題意識を喚起する研究の推進」

各教科部が共同して授業研究を企画，推進，整理することを目的として研究を進めている。年度当初に提案授業を行ったり，自主研修会や校内研における主題にかかわる協議及び授業反省記録の配布をしたりする取り組みを通して，主題に対する共通理解を概ね深め，日常の授業づくりの中で意識をして実践することができた。授業協議会において各教科での視点が偏らないよう焦点化した議論を進められるようにすることが今後の課題である。

5　東雲中学校「義務教育における学びの文化の創造－つながる学びを育む授業づくり－」

義務教育の学びそのものを問い直し，小中連携教育を方法として新しい視点を取り入れた授業づくりの在り方を探ることを目的として研究を進めている。義務教育９年間をⅠ期（小学１年～小学４年），Ⅱ期（小学５年～中学１年），Ⅲ期（中学２年～中学３年）に分け，それぞれの段階における目指すべき学び文化を創造する授業づくりの視点を模索している。今年度は小中合同の研究会を開催して小学校・中学校が授業の在り方を提案することができた。今後は，教科・領域での認識の違いを軽減するために，全体で意見を共有しながら研究を進めていくことが課題として見えた。

6　附属中学校「スーパーサイエンスハイスクール及びコアＳＳＨの取り組み」

ＳＳＨ研究開発とコアＳＳＨ研究開発を進めている。活動の具体として，「創造性を養うプログラム」「国際力を身に付けるプログラム」「地球規模で考えるプログラム」の３つのプログラムを設定して実施した。生徒のアンケートより，自己効力感や科学を学習する価値の認識が高いという結果が得られた。今後は従来の取り組みをインテグレートするとともに，他との連携や協力を進めていくことが課題である。

7　附属福山中・高等学校「クリティカルシンキングを育成する中等教育，教育課程の開発」

物事の本質を見抜き，思考・判断するクリティカルシンキングの視点に立ち，これを柱に据えた系統的なカリキュラムと指導方法の研究開発を全教科で行っている。具体的な取り組みとして，「現代への視座」という新教科を中学２年から高校２年で創設し，その指導計画や教材開発，総合的な学習や教科の発展的な取り組みの開発及び試行を通じて教材の妥当性を調査した。生徒の意識調査から興味・関心をもって取り組み，新しい視点の習得・活用や表現力の育成に各教科及び総合的な学習の時間に相補的に働くことが伺えた。今後は，生徒の変容から本研究の妥当性を確かめ，他校でも実践できる教材の提案をしていきたい。

分科会記録（教育実践部会）

「各学校園の特徴を活かした教育実践」というテーマで，各学校園が進めている研究を発表した。その概要を以下にまとめた。

１　附属東雲小学校「特別支援学級とともに進める交流及び共同学習」

障害がある児童とない児童が、かかわりの場をとおしてお互いを理解し、ともに生活を創っていくことができるように、小学校特別支援学級児童と中学校特別支援学級生徒との共同学習を行っている。特別支援学級との共同学習を通して、共に生きていく生活の場を設定したという報告があった。また、周りの子の接し方や関わり方についても学ぶことが、この活動の目的になっており、活動を通して、障害のある子どもたちは少しずつ自信をつけてきている。また、学年があがるごとに、「障害のある」という捉えではなく、一人の友だちとしてとらえることができてきたという成果があった。特別支援教育における小学校から中学校へのスムーズな移行のあり方が課題である。

２　附属三原小学校「校外班編制（地域別児童会）」

通学路や通学方法、休日の遊び場や 110 番の家などについて交流することで、安心・安全に通学したり、地域で生活できるようにする取り組みである。また、同じ地域に住む子どもや保護者が、声を掛け合い、安心、安全に生活できるようにするねらいもある。成果としては、具体的な危険区域を確認するため、クラスでの通学指導がしやすくなった。また、危険な場所を意識して、登下校できるようになった。しかし、毎年、年度初めの1回のみの活動のため、継続した活動にはなっていない。また、防犯意識を高める活動を継続したり、取り組みを深めていくことができていないことが課題である。

３　附属小学校「自主・協同・探求」の精神を育み鍛えるための活動の推進」

教科担任制をとっており、先進的な指導を進めている。その中で児童に「自主・協同・探求」の精神を育む鍛えるための活動を推進している。ただし、この活動については、児童自身が「自主・協同・探求」の精神を持っていなければ成り立たないところがあるので、その点を強調して指導をしている部分もある。また、特設単元委員会と、総合的な学習ともタイアップした取り組みとなっている。成果は、継続的な取り組みのおかげで、児童の主体的な学校生活が営まれており、自ら考え、自ら行動する気風が自然と身についてきている。しかし、子どもを取り巻く環境は日々変化しており、適切に状況を把握し、必要な指導をおこなう必要がある。

４　附属東雲中学校「国際理解・異文化理解を深める交際交流プログラムについて」

国際交流活動を通して、異なる文化や考え方を受け入れ、理解しようとする意欲の向上を図ることを目的としている。具体的な活動は、インドネシアMENDOYA4中学校、Odyssey School、Exploris Middle Schoolの３校と年間４回の交流学習を実施してきた。生徒は、楽しんで交流しており、お互いに受け入れている。また、自分の思いを伝えたいと言うことから、英語学習に意欲を持って行う生徒が増えたという成果があった。今後の課題としては、交流活動が、東雲中学校だけにとどまっているので、広島市内の中学校と協同して活動をおこなう取り組みを模索していることである。

５　附属三原中学校「地域の高齢の方との交流学習」

幼小中一貫の教育力を活かし、異年齢交流など小学校までに学んだ基盤とした、家庭科教育における取り組みである。毎年継続して実施しており、「食がテーマ」であるが、人　と

人とのかかわり、地域の方々とのつながり、お互いのコミュニケーション、高齢者の方への理解、異校　種・異年齢とのかかわりを中心として指導している。現代の少子高齢化社会の中で、人と人とのかかわり　が希薄になりがちな地域に生活する子どもたちにとって、高齢の方と交流学習は、大変貴重な経験である。しかし、子どもたちの家庭での生活体験が年々低下傾向にあり、授業時数が少ない中で、家庭科だけの時間では目的を達成するための取り組みが困難なことが課題である。

６　附属中・高等学校「ＥＳＤのカリキュラム開発―ユネスコ・スクールとしての実践―」

ユネスコの主導するＥＤＳ（持続可能な開発のための教育・持続発展教育）をすすめ、ユネスコスクールとしての教育実践を行っている。具体的な活動は、各教科や総合的な学習の時間で、ＥＳＤの教材開発をすすめ、ＥＳＤの授業づくりを行っている。また、課外活動としてユネスコ班は、街頭募金をしたり、日本ユネスコ協会連盟の主催するユースセミナーやスタディーツアーに参加をし、そこで学んだことを校内に還元したり、校外に発信したりする活動も行っている。課題は、体系化・ネットワーク化を行っていないので、教科学習と特別活動、課題活動とをどのように有機的に結びつけ、組織的体系的なＥＳＤにしておくかが課題である。

７　附属福山中・高等学校「学友会指導について」

自己指導能力と自治の力を身につけるための学習会（生徒会）の取り組みが報告された。学友会の主な活動内容は、クラブ活動に伴う費用の会計処理、広報誌の発行、体育祭、文化祭などの学校行事の運営である。行事を運営するために、生徒たちは、過去の資料をもとに綿密なマニュアルを作り上げ、仕事を細分化して個々に割り当てて活動をしている。成果は、いくつもの学校行事を運営しながら、運営能力＝集団を動きを想像する力をつけていけたことである。しかし、マニュアル通りにやろうとするあまり、融通が利かない、マニュアルから外れた動きに対する対処ができないといった課題があるので、自分で考えて行動できる生徒を指導していくことが今後の取り組みである。

８　附属三原幼稚園「留学生との交流～いろいろな人とかかわる力の育成を目指して～」

広島大学の留学生との交流を年間計画に位置づけて行っている取り組みである。交流学習の目的は、国や文化、慣習の違いや言葉の違いに関係なく、思いが伝わる喜びや一緒に遊ぶ楽しさを体験し、いろいろな人に慣れ親しませ、国際的コミュニケーション能力の芽生えの育成を図ることである。年間と通した継続的指導のおかげで、自分からかかわろうとするこどもが増えたことと、国によって違う文化があることへのよさを受け入れることができるようになってきたことである。今後は、留学生の母国が偏っているので、偏りがないように配慮し、双方向に関わりを深める活動を模索したい。

９　附属幼稚園

「森の幼稚園構想」を掲げ、一日中森の中で過ごす「森の日」を週に１～２回設けるなど「森の幼稚園」をめざした報告である。森で遊ぶことを通して、豊かな感性や、知的好奇心、身のこなしなどを体得し、「心豊かに生きる力の育成」を目指して取り組んでいる。具体的な取り組みは、登園したら、部屋に入らずに直接森に入る「森の日」を一昨年度より実施している。また、森林インストラクター、野鳥の会の会長、ネーチャーゲームをされている方を「森の達人」の非常勤講師として招き、保護者と共に活動を行っている。成果は、限界まで挑戦しようとするこどもや、ファンタジーの世界を楽しむこどもが増えたことである。また、身のこなしが格段よくなったことである。今後は、森の保育を通して育つものを、具体的な子どもの姿を明らかにし、幼児期に大切な体験を発信していくことが課題である。

これからの附属校への新たな歩みに向けて

第3回全国附属学校フォーラム実行委員会

このたびのフォーラムは、附属学校のおかれている現在の状況を改めて把握し、さらに今後、附属学校が目指す目標を議論する場として、大変に有益であったと考えております。今回のフォーラムは、全国に向けて広島大学11附属校園の成果を発信するということよりも、11校園の全教員が一同に会し,お互いの実践をより広く深く共有する中で広島大学の附属校園として共通の課題や目標を探り確認すること、また、より効果的な大学との連携にあり方についても議論することに焦点を当てました。特に母体である国立大学のあり方にも検討が迫られている状況において、附属学校もこれまでの活動を振り返りながら新たな目標を設け、今後の活動を再構築する必要に迫られています。

附属校園にはそれぞれの学校の児童・生徒のための教育の充実と推進、学部生・大学院生のための教育実習の実施、教員のスキルアップと教育界への貢献を目標とした教育実践研究の推進という３つのミッションがあります。中でも基本的ミッションである教育実習については、今年度、附属校園の教員と大学教員が連携したアメリカ、フィンランドおよびシンガポール3カ国への海外調査研究が実施されるなど附属校の教育実習充実への期待は非常に大きくなっております。言うまでもなく実習充実の必要条件として各校の教育充実、また教育実践研究の充実は欠かすことができません。これらは三位一体と言うべきでしょう。このような背景をもとに各分科会では、各校の実践の紹介と議論を通し、次のようなことが提案・議論されました。

- 教育実習は、社会人としての認識、生徒理解、生徒とのコミュニケーション力を高める場として重要であり、教職への意欲を高めるうえでも重要であること、教育実習充実化のために授業後の反省会やグループ討議の工夫が重要であること、大学のカリキュラムにも改善が求められること
- 教育研究としてSSHプロジェクト、クリティカルシンキングの育成、幼小中一貫教育、教師の授業力向上、新しい授業づくり、自然環境を生かした教育などいずれも附属校園の特徴を生かした研究であり、かつ、日常の教育にフィードバックされることを目指した試みであること
- 各校園では、地域高齢者との交流、特別支援学級との交流、留学生との交流、校外班編制、国際理解、自主・協同・探求、ユネスコスクール、学友会指導、森の幼稚園、地域や学校で支援が必要な人々との交流や連携、国際交流、児童生徒の自主的・主体的な活動促進などこれからの社会のキーワードというべきことを目標に教育実践が行われ、それぞれ成果が得られていること

今回のフォーラムは短い時間ではありましたが、広島大学11校園の教員が、他の校園の活動の成果や課題をお互いに理解することができたと考えます。それぞれの校園の活動展開に対して数々のヒントが得られたのみならず、今後、さらに議論を重ね広島大学附属校園としてのこれから向かうべき共通の目標を設け、各校がそれに向かって活動を推進していければと思います。

○全体会の様子

○教育実習部会の様子

○教育研究部会の様子

○教育実践部会の様子

○懇親会の様子

HIROSHIMA UNIVERSITY

主催◉広島大学　　主幹◉広島大学附属東雲・三原
後援◉広島県教育委員会／広島市教育委員会／東広島市教育委員会／三原市教育委員会／福山市教育委員会

第３回広島大学附属学校園合同全国フォーラム実行委員会　発行